

## 無題

中根 秀夫 Hideo NAKANE

一日金曜日。首都圏全域で交通が麻痺し、駅はいつ動くとも知れぬ電車を待つ人で溢れかえった。私は混雑する路線バスを乗り継ぎ、最終的には他の多くの人と同じように幹線道路沿いを歩いて帰った。しかし、本当に深刻な状況を知ったのは家でテレビをつけた後だった。繰り返し流れる地震と津波の映像。その「現実」に、私はただ茫然とするしかなかった。

\*

三月は父の傘寿で、お世話になった方々への記念として仙台の業者にガラス製のフォトフレームを発注し、数日前にそれが納品されたばかりだった。私はガラスを使って作品を制作することがあり、その業者と以前から付き合いがあった。地震の翌朝、その記念の品の発送を打ち合わせるために家を出た。街は意外な程落ち着いており、都内で帰宅難民となった人たちも、一様に安堵の表情を浮かべ家路を急いでいた。午後になり、集荷に来た宅配業者に、北関東から先の道路網の寸断を告げられた。被害の大きさを、「私たち」の直面する「現実」として受け止められない自分にあためて気づく。

テレビ…。押し寄せる津波、押し流される住宅。原発をめぐる緊迫した空気。緊急地震速報の奇妙な音列が番組を何度も中断した。ふと思いたち、仙台の業者にメールを書いた。仙台は地震と津波で大きな被害を受けていた。

週明けの一日。被災地から二五〇キロ以上も離れた東京郊外は、一転してパニックに陥ってしまった。電力供給不足で電車の運行が制限され、計画停電の実施が明らかにされた。朝、いつもより早く着いた駅で職場方面に向かう電車の終日運休を知る。いまだかつてこんな事態を想像したこともなかった。家に戻り再びテレビをつける。目の前に広がる映像はただ、ただ恐ろしかった。どれも「私たち」が直面する「現実」でありながら、一方で私の手が直接届かない「現実」でもあった。テレビから目が離せなくなった。怖くて、怖くてしょうがない。でも目を逸らすのも怖いのだ。結局朝から晩までテレビを見続けた。いや、布団に入ってからもテレビを消せなかった。また奇妙な音列…。

翌一五日、仙台の業者から返事が来た。電気が回復したらしい。「家の中はめっちゃくちゃですが、元気にしておりますのでご安心ください」。東の間の安堵。しかし、福島原発は一号機に続き三号機でも水素爆発が確認された。水素爆発？二号機は？四号機は？海外の友人から相次いでメールが届く。日本を脱出するなら受け入れてくれるという申し出もあった。自分がテレビで見ている「現実」と海外の友人の見た「現実」。無残にも吹き飛んだ原子炉建屋を見る。

朝が来て夜が来て、また朝が来る。テレビを消すことができない。虫の知らせだったのか家には随分と多くの買い置きがあった。とりわけ欲しい物など無かったが、不安を抑えきれずに近所のスーパーまで足を運んだ。いつの間にかすっかり空になってしまった米と飲料水の棚。皆、残り少ない商品を奪い合うかのように自分のカゴに詰め込んでいく。それはきつと大切な家族のためなのだろう。そして誰がこの「現実」を咎めることができようか。しかし、その集団的なパニック状態は私にとって非常に恐ろしいものだった。計画停電中はスーパーの営業を中断するという。レジに長い列ができる。たとえ目をつむっても、そこには人も車も家屋も農地も何もかもをのみ込む津波、その津波のさなかに防災無線で懸命に避難を呼びかける女性の声、瓦礫の山と化した町で行方不明の肉親を懸命に捜す人々の半ば諦めをたたえた表情が、映像として頭の中に何度も、何度も繰り返し押し寄せられる。人間が築いてきたものの儂さ。一七日、原発三号機にヘリコプターからの放水が行われた。おそらく、その効果は誰の目からも疑わしいものだった。「現実」？「私たち」の？

\*

地震から一週間、一八日金曜日。朝、運休区間が解消されぬことを確認し駅を後にする。地下の通路を歩くとその先に小さな花屋の店先が見えた。店頭に値引きされたチューリップが積まれている。こんな非常時に花を求める者など無かったのだろう。なんだかすぐく懐かしく、そしていとおしい感じがして、その花を指で触れてみた。アルバイトの女性は、少し申し訳なさそうに「一緒に」とその脇に差しあつた桜の枝を勧めてくれた。細くしなやかな枝に小さな白い花びらがたくさんついていた。

棚の上の花瓶を探そうとして、踏台の横にあつたバケツが目に入った。結局、そのバケツの方に水を満たすことを決め、桜を二枝、白いチューリップ三本、紫のチューリップ二本をその水に放した。部屋の空気がわずかに緩んだような気がした。いつもの癖でテレビのリモコンを手を取ったが、少し考え、かわりにテレビの前にそのバケツを置いてみた。花は窓から差し込む光を透かした。その時、ふと、その春の花たちを水彩で描いてみようと思つた。その感覚は私にとつて本当に久しぶりなことだった。細い桜の枝はやや湿つた土の匂いがし、小さな花びらからはほのかに甘い香りが漂つた。チューリップは水を吸つたばかりの青い匂いがした。

追記 八月一日現在、震災による死者は一万五六九〇人、行方不明者は四七三五五人。五か月を経た今も、私は被災者の方々にかける言葉もみつかりません。大きな衝撃にその言葉が奪われてしまったようなのです。せめてここにインターネット上で偶然出会った「うた」を記します。多くの人の手に受け継がれてきた大切な「うた」だと思います。

夜明けのうたよ わたしの心の小さな倅せ 守っておくれ

夜明けのうたよ わたしの心に思い出させる ふるさとの空

『夜明けのうた』より 岩谷時子／いずみたく

うれしい知らせ。仙台の業者が営業を再開。